

語ることと聴くこと
呼吸障害をもつ子どもを介護する母親の世界への接近

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター

要約

本研究では「語ることと聴くこと」の意味を明らかにした。研究方法は、研究に参加してくれた人の言葉と、それを聴いたわたしの振り返りを、メルロ=ポンティの言語論を応用し、回顧的に分析した。

経験の意味がどのように語りだされるのか。それを情動的意味としての所作的意味によって捉えた。また、言語的所作としての比喩表現ならびに語る言葉が、経験の意味へ聴く者を導いていった。そこで描きだされたものは、現在において過去と未来に触れた経験の意味であった。また、そこから自己の厳しい未来への炸裂があり、あたらしい自己を描きだした。そこに、病気によって生き方を根本的に変えることを要求される人の世界があった。この過去と未来の捉えなおしには自然や人のいる場、時間と共にある或る力があつた。ここには<作動指向性>がはたらき、それは前客観的な生活を統一しているものであつた。

沈黙の経験を語るとはどういうことか。まず、主体は語る主体となることを要求されていた。そして、語ることによって捉えなおされた未来と過去は永遠の現在となって、自分自身にも秘密になっている諸能力が展開された。沈黙の経験は語ることによってこそ、真の思考になった。

聴くとはどういうことか。それは、一切の諸行為が前提される前客観的な領域にある知覚が、聴く者自身によって自己を探索されることである。その探索によって、語る者のありのままの世界へ接近することができた。そこには聴く者の身体全体で了解する、実存の転調と変革があつた。このとき、聴く者は語る者の目指す世界へ到達し、それが聴く者の目ざす世界であつた。語る者と聴く者両者にとって、生活を捉えなおすことによって見いだされる意味は、理念ともいふべきものであつた。それは、生活を豊かにし人生を生きるに値すると考えさせるものであつた。

内面的な経験を表現し、明確にする言語の可能性を解明するにあたって、本研究は、その手がかりとして、メルロポンティの言語と相互主観性の理論を採用したが、研究の結果、この理論が看護における「語ることと聴くこと」の意味を明らかにするうえで重要な意義をもち、看護あるいは看護教育の方法の一つとして十分に有効な理論であることが確認された。